ディートリッヒ・ボンヘッファーの『倫理学』の現代的意義*

船　本　弘　毅**

一、はじめに

ディートリッヒ・ボンヘッファーが、現代の神学またキリスト教倫理に与えた深くて広い影響とその意義を否定する者はいないであろう。ボンヘッファーは1945年3月、わずか39才の短い生涯を終えたのであるが、彼の生涯と思想は、先づドイツにおいて、さらにアメリカにおいて注目され、やがてその影響は全世界に及んだのであった。戦後、我国のキリスト教世界において最も多くその言葉が語られ、引用されたのが、ボンヘッファーであることは衆目の一致するところであろう。

しかし今や、いわゆるボンヘッファー・ブームは去ったかのようである。そこには時代の変化と共に、キリスト教世界全体に見られる保守化の傾向とが深く関わっているのかも知れない。彼の名が以前ほど口にされなくなったのは事実である。しかしそのことは、彼の神学と思想がその意味を失ったということでは決してない。

筆者はかねてから、ボンヘッファーが、第二次世界大戦下のドイツにおけるナチスへの抵抗運動者としてのみとらえられ、その悲劇的な死が現代における殉教者、あるいは、現代におけるキリスト者のあるべき姿であるというように一方的に讃美されることに疑問を唱え、彼の神学と思想にもっと注意が向けられるべきであるということを主張し続けて来た。

本稿はボンヘッファーの『倫理学』の中心的命題を追究することにより、彼の変らざる現代的意味に光を当てようとするひとつの試みである[1]。

二、ボンヘッファーにおける『倫理学』の位置

ボンヘッファーの弟子であり、友人であり、また彼の最も良き理解者・紹介者でもあるエーベルハート・ベートゲは、ボンヘッファー伝の決定版とも言える大著 “Dietrich Bonhoeffer, Theologie–Christ–Zeitgenosse” を1967年に公刊したが、ベートゲはボンヘッファーの生涯を三期に分けて述べている。そしてそれは同時に彼の神学思想の発展の段階も示しているように思われる。

すなわち、第一期は1906年から1931年、アメリカに留学し、ユニオン神学大学での学びを終えて帰独するまでであり、ベートゲはこの時期を「神学の魅力」の時代と名づけている。第二期は1931年から1940年、第二次世界大戦の始まった翌年までであり、これは「キリスト者であること」の時期である。第三期は1940年から1945年の死に至るまでであり、この時期は「同時代人であること」と特徴づけられている。

ボンヘッファーはその研究を組織神学の領域から始めたが、彼の関心は次第に聖書の釈義的研究、さらに倫理学の問題へと移って行った。そし

*キーワード：現代社会、キリスト、究極以前の生
**関西学院大学名誉教授

1) 筆者は1998年4月より東京女子大学の学長に転任したが、その決定が1月に入ってからであったため、関西学院大学における最終講義を行う機会を逸してしまった。本稿は中学部の生徒として入学以来、満50年を過ごした関西学院を去るに当って、本来行うべきはずであった最終講義に代るものとして記したものである。したがって新しい論文というよりは、すでに発表したものに多くを拠りながら、ボンヘッファーの『倫理学』の持つ現代的意義を明かにしようとするエッセーである。